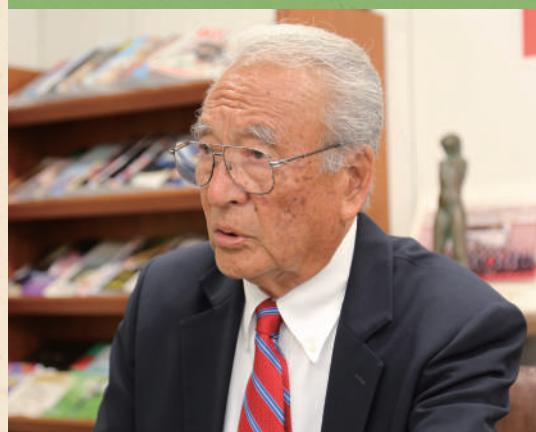


理事長

PART  
1

対談



## 奥山 忠先輩

Tadashi Okuyama  
東京JC 1974年度第25代 理事長・  
東京JC日中友好の会 最高顧問  
株式会社東京ニュース通信社 相談役

踏み出すのが怖くとも大事なのは、向こうへ飛び込むことだ

塩澤 今回は、昔のJCは非常にダイナミックだったという話を。

奥山 僕、中国問題やったでしょ。でも、最初は中国のことなんて全然知らなかつたんだ。日本はアメリカの同盟国で、当時は中国と友好関係を結ぼうという考えは全くなかつた。僕が副理事長の時に「国際問題をやれ」となつて、その二年前の1972年に田中角栄さんと大平正芳さんが中国に行つたことから日中友好運動をやつて。国際委員会の委員長が社会党青年部の団体の一員として

行つたんだ。「東京JCが来た」と特別待遇されて、「ぜひ来年は東京JCの皆さんに来て欲しい」となつた。「経済人が來た」と思つてゐる。東京青年会議所には経済人の息子が多いから。向こうで大歓迎され、意氣揚々と帰つて来て「来年行きましょう」と僕に報告したんだ。翌年、僕は理事長に載つてインタビューされたりしました。そんな先輩も次の訪中団で一緒に行つたら「中国はいな」つて。

塩澤 未知の怖さなどがあつても将

大学卒で日本語が上手く、いわゆる江戸弁で我々20人に話をしてくれたんだけど「これが中日友好協会の会長さんか」と皆惚れ込んで、この人の言う通りにやつていれば間違いないとなつた。その時に紹介されたのが胡啓立さん。「この男が将来の中国を背負つて立つ男だ。親しくしておいたら間違いないよ」と紹介されたら中日友好協会の会長になつた。

塩澤 出発前に東京JC内でも何か言されましたか?

奥山 「共産党の国と日本がなぜ付き合つんだ、何考へてるんだ」と言つられた。でも「共産党の国で今は貧乏だけれど、とんでもない国になるんです」と僕は言つて。行つたら先輩方に怒られるのを承知で行つた。そ

したら大評判で、JC新聞だけでなく一般紙にも記事が載つてインタビューされたりしました。そんな先輩も

持ちを断ち切つて、思い切つてやることが大事なんですね。

塩澤 先輩のように怖いという気持ちを断ち切つて、思い切つてやることが大事なんですね。

